平成 28 年度 8020 公募研究報告書抄録（採択番号：16-1-02）

研究課題：医科歯科連携による口腔と脳神経疾患の大規模コホート研究

研究者名：小林　恒[1)]、中路重之[2)]、高橋一平[2)]、乾　明成[1)]、田村好拡[1)]、小山俊朗[1)]
所属　　：1) 弘前大学大学院医学研究科歯科口腔外科学講座、
2) 弘前大学大学院医学研究科社会医学講座

【目的】超高齢化社会を迎えた我が国において認知症は急激に増加しており、要介護なる重大な疾患である。しかし、認知症は根本的な治療法はないため発症予防は極めて重大な喫緊の課題である。従来より口腔環境と認知症との関連性についての報告されている。そこで地域住民において口腔機能の低下、すなわちオーラルフレイルの予防が認知機能低下の予防につながるかを検討する必要がある。本研究では口腔機能と認知機能の関係を明らかにすることを目的として、自立した地域高齢者を対象として歯数と認知機能障害との関係を調査した。特に口腔機能として舌圧と滑舌機能をみるオーラルディアドコキネシス（ODK）に着目し認知機能障害との関連性について検討を行った。

【対象及び方法】対象者は 60 歳以上の自立した一般住民 488 名（男性 176 名、女性 302 名）を対象とした。調査項目は、背景因子として性別、年齢、BMI（body mass index)、教育年数を使用した。認知機能の評価は、MMSE（Mini-Mental State Examination）試験および、論理的記憶（WMS-R）を行い認知機能障害、Mild cognitive impainment（MCI: 軽度認知障害)有無を評価した。口腔内診査は歯数、義歯の使用状況、舌圧、オーラルディアドコキネシス（ODK）について調査が行われた。

【結果】 認知機能障害の有無と歯数は有意に関連していることが明らかとなったが､MCI に関しては傾向を認めるものの有意な差は無かった。口腔機能である舌圧と ODK は年齢と伴に有意に減少していた。そして認知機能障害の有無により舌圧と ODK は歯数と年齢で調整しても有意に相関していることが明らかとなった。

【考察とまとめ】　本研究により認知機能の低下と口腔内環境としての残存歯数が関連していることが確認され､認知症発症の前段階である MCI の段階においても残存歯数の関連性が窺われた。さらには口腔機能の低下であるオーラルフレイルと認知機能障害の関係が明らかとなった。ゆえに口腔機能の維持つまりオーラルフレイルの予防がが認知機能低下の予防につながり高齢者において要介護状態への移行を抑制することで健康長寿につながる可能性が示唆された。